森林吸収源インベントリ情報整備事業ブロック別現地講習会（九州）

開催日：2018 年 6 月 5 日（火）
場所：福岡県八女市立花町（格子点 ID400095）
受講者：7 名（(株）九州自然環境研究所）
講師：小林、阪田（森林総研立地環境研究領域)、稲垣（昌)、鳥山（森林総研九州支所）

概要

九州ブロックの調査を担当する（株）九州自然環境研究所の調査担当者 7 名を対象に、福岡県八女市の民有林で現地講習会を実施した。受講者 7 名のうち 3 名は本事業の調査経験が豊富で、4 名は経験が乏しかった。天気は曇りのち雨であった。福岡が梅雨入りしている中で代替日の調整も難しく、雨の状況に注意しながらの講習となった。

8 時 30 分に福岡県八女市の老松宮神社に集合した。すでに小雨が降り始めており、午後にかけて雨が強くなる可能性があったため、受講者代表から基準杭を決めたあとは 3 班に分かれて土壌断面の粗掘りを行い、雨よけとなるタープを張って調査を進める案が示された。講師からは、この進行案で問題はないがまずは基準杭を早く見つけることが大事とコメントした。老松宮神社から試験地付近まで、講師の車両 1 台と受講者 3 台の計 4 台で移動した。受講者が事前に林道の下見を行っており、駐車場所の確保はスムーズに行われた。調査地は林道脇のヒノキの林分である。傾斜がきつく土壌の下層には礫が出現した。今回の調査地の選定理由として、アクセスのよさに加え、講習会のターゲットである H 層の観察機会の可能性が考慮された。

到着後、基準杭を捜索した。中心杭は調査開始直後に見つかったが、4 方位のうち N 杭と W 杭がみつからず、森林生態系多様性基礎調査の野帳から求めた距離に仮杭を設置した。すべての杭の確定に約 1 時間かかったため、確定済の地点から土壌断面の粗掘りを開始した。受講者は 3 班に分かれ、それぞれに経験者と初心者が参加し、N 地点、E 地点、W 地点の 3 か所で土壌断面調査を行った。受講者が主体的に調査を進め、講師 3 名が各班をチェックし、残り 1 名の講師が記録を行った。講習会では 3 箇所の土壌炭素蓄積量調査に集中することとし、残りの調査は受講者が後日完了することを確認した。

昼食のタイミングは進捗に応じ、地点毎に判断した。過去の調査結果から、E 地点と W 地点で H 層が出現する可能性があると思われた。しかしながら、結果として E 地点、W 地点ともにルートマットの上部または内部にまだらに H 層が存在する程度であった。

ルートマットがある場合、堆積有機物をどこまで採取するかとの質問があり、特にヒノキ林ではマット状の根がリターをしっかり綴った状態になっていることがあるので、丁寧にほぐして採取する必要があると回答した。採取対象に関して、枯死して倒れている根株の先（直径 5 ㎝未満）が堆積有機物採取枠内にかかった場合は採取するかとの質問があった。この質問は本所に持ち帰り後日回答することにした。検討の結果、倒れている根株は

枯死木調査の対象であるので堆積有機物としては採取しないことが妥当であると判断し、その旨をメールで回答した。断面記載では、表層が波状にゆがんでいる場合にはスケッチで線を書き直す必要があるかとの質問があり、表面がある程度波状にゆがんでいるのは普通であり、スケッチは模式的なものなので、細かな凹凸は詳細に描写する必要はないと回答した。

16 時 30 分までに 3 地点の土壌調査を完了し、プロット下の林道で講習会のまとめを行った。E、W、S 地点の土壌断面の特徴についての各講師からのコメントと講師代表による講評を行い、受講者代表からの、昨年度にひきつづき高い実施率で取り組みたいとのコメントの後、講習会を終了した。調査中は、経験の少ない受講者が他の受講者にトランシーバーで情報を求める場面が見られ、連携のよさが伺えた。一日を通じて雨模様で、タープを張りながらの調査であったが、土壌炭素蓄積量調査に集中することにより要点を伝えることができたと考えられる。その一方、プロットの傾斜が急であったため、他地点の土壌断面を見るための移動が困難であった点は、次回の講習会の地点選定の際に考慮すべきと考えられた。

講習会開始の挨拶

距離計測による仮杭の設定

新たに導入した堆積有機物採取枠

土壌断面作成（W 地点）

講師による H 様物質の確認（E 地点）

N 地点の土壌断面

E 地点の土壌断面

W 地点の土壌断面

講評と閉会挨拶